

※朗読する際は、自分なりの文章のリズムを意識して、自由に読点「、」を打ち直してください。

テキスト 1

『夜の忘れ物』

真夜中過ぎ、いつものように僕は暗い通りを歩いていた。ここ最近、毎日こうしてこの時間、僕は街を散歩する。いや、散歩じゃないな。ちゃんとした目的があるのだから。

ところどころに灯った街灯に目を凝らす。等間隔に並んではいるが、点灯していないものもある。なんだかひどく頼りない。あるべきものがない、そんなむずがゆい感覚。それはまさしく、今のこの僕の心情とまったく同じなんだ。

僕の目的はこの明かり。この明かりを求めて街を歩いている。街灯から街灯へと……。

時計を見た。既にもう一時間が経っていた。けれど、僕は変わらず目的を果たせないでいる。いつもと同じ、いつもと同じ繰り返し……。

路地を左へと折れた。その時だった。背後から肩を叩かれた。僕は驚き、慌てて振り返った。目の前には、R（アール）がいた。

「悪い。何もびっくりさせるつもりはなかったんだ」

「それでも驚くよ。こんな真っ暗な道で肩を叩かれたら」

「それもそうだな」Rはにやっと笑い、綺麗な白い歯を覗かせた。「ところでお前、こんな時間に何してるんだ？ 下ばかり向いていたようだが、落とし物か？」

「……ずっと僕を見てたのかい？」

「違う。おい、そんな怖い顔をするな。偶然お前によく似た背中を目にして、もしかしたらと思ってついて来ただけだ」

僕はじっとRを見つめた。Rは微笑を浮かべたまま、涼しく受け流す。

「お前、体調でも崩しているのか？ ひどく顔色が悪いぜ」

「いや、別に……こんな暗がりでも僕の顔色がわかるのかい？」

僕は含みを滲ませる。けれどRはあっさり「ああ、わかるよ」と答えた。

「俺にはわかる。お前の顔色も、お前の背中も」

Rはなぜかそう断言した。僕はまた彼の顔を凝視する。「君こそこんなところで何をしているんだ？」そう訊ねようとした。しかし、その疑問は喉のどこかで引っ掛かった。街灯にわずかに照らされたRの目。その瞳が一度、ゆっくりと頷いた……ように見えた。

「知ってるぜ、お前の探しものを」そう告げられているような気がしてならなかった。

「少し歩こうか」

Rは僕の返事を待たずに先に歩き出した。僕はそのあとを追う。

「実はな、お前がこうして夜中にさまよっていること、俺は知っていた」

「……なんだって？」

「下ばかり見て歩くお前の姿、その背中を目にして、お前の目的はすぐにわかったよ」Rはそこできると振り返った。「お前、自分の影を探しているんだろう？」

僕の足はその場で固まった。

「やっぱりな。そうだろうと思ったぜ」と、Rは言った。「お前、自分の影をどこかに落としたんだろう？ 影をなくしたんだろう？ そんなお前は太陽の下を歩けない。だからこんな真夜中、街灯から街灯へとさまよっている。同じようにどこかをさまよっている自分の影を探して」

そう告げると、Rはまた背を向けて歩き出した。僕はまだ動けずにいる。Rの声だけが遠くから耳に届く。

「どうして俺がそれを知っているのかって？ そんなの答えは簡単だ」

Rはこちらに背を向けたまま、ふと足を止めた。街灯の真下、明かりの真下で。

Rの足元には影がなかった——そう、僕と同じように。

Rもまた、どこかに自分の影を忘れてしまったのだ……。

(了)